

ていないが、control 不能なてんかんの例や出血をくりかえす例などは適応があると考えられる。本例では、CAのみの摘出で良好な結果がえられ、症状発現にはCAが関与していたものと推測された。以上てんかんをひきおこす angioma の手術適応を考えるうえで興味深い症例と考えられたので報告した。

特別講演

てんかんの外科的治療の可能性

東京都立神経病院 脳神経外科医長

清水 弘之 先生

第229回新潟外科集談会

日時 1989年12月2日(土)

午後1時

会場 新潟大学有任記念館

一般演題

1) 当科における甲状腺癌(特に濾胞腺癌)症例についての検討

桑山 哲治・山本 睦生 (新潟市民病院)
 斎藤 英樹・藍沢 修 第一外科
 丸田 有吉・若佐 理

過去16年間で当科において初回治療を施行した甲状腺癌は90例ある。分化癌が大部分で乳頭腺癌71例、濾胞腺癌12例である。濾胞腺癌の診断は難しいといわれているが、当科の症例においても手術診断の正診率は58%で乳頭腺癌90%に比べ非常に低い。これは術中病理組織診断が難しいことが一因と思われるが、術前診断をより正確に行う必要があると思われる。

2) 顔面神経麻痺を呈した乳癌骨転移の1例

大谷 哲士・松木 久 (日本歯科大学新潟)
 川合 千尋・川島 吉人 (歯学部 外科)
 松木美智子 (同 麻酔科)

乳癌の頭蓋骨転移が原因で生じたと推測される顔面神経麻痺をきたした症例を経験したので報告する。

症例は45才、女性。当科入院時、腫瘍は胸壁に直接浸潤し、鎖骨上、腋窩リンパ節に転移を認めた。また左耳介後部、頬部、下顎部に疼痛があり、左顔面神経麻痺を認め、骨シンチにて全身骨転移が認められた。以上より、

根治術の適応はなく化学療法、内分泌療法を施行することとし、9月26日両側卵巣摘出術施行。10月2日よりCAF療法及びTamoxifen, MPAによるsequential therapy 施行。その後痛みは軽減し、顔面神経麻痺も改善した。

腫瘍性病変による顔面神経麻痺は、比較的稀なものであるが顔面神経麻痺を初発症状とした症例の報告もあり、腫瘍によると思われる症状を見逃さずに全身の検索をする必要があると思われる。

3) 乳癌に対する胸筋温存手術と一期的乳房再建の試み

三浦 宏二・高野 征雄 (秋田赤十字病院)
 工藤 進英・富山 武美 (外科)
 近藤 公男・小山 諭

当科では昨年より乳癌に対して胸筋を温存する児玉法を標準術式とし、さらに本年より新しい試みとして一期的乳房再建術を施行しているため報告する。

1988年4月から1989年9月まで28例の乳癌症例に児玉法を施行したが現在まで再発例はなく、患側上肢の運動障害、浮腫等も全く認められない。郭清リンパ節数を比較すると児玉法は定型的乳房切断術と差を認めずかつPatey法よりも有意に多かったが大胸筋の萎縮頻度はPatey法よりも有意に低かった。1989年4月より希望患者9例に児玉法にひき続き広背筋皮弁による一期的乳房再建術を施行した。volume不足の3例にはsilicon bag prosthesisを併用し、4例には乳頭乳輪の再建も行った。若干の左右の非対称性は認めたがブラジャーの装着により外見上の不自然さは認められなかった。

児玉法と一期的乳房再建術は定型的乳房切断術と同程度の根治性を維持しながら術後の機能障害を最小限に抑え、しかも女性のfemininityを保つ優れた術式と考えられる。

4) 閉塞性黄疸をきたした十二指腸癌の1例

霜田 光義・阿部 要一 (木戸病院 外科)
 日野 浩司
 恵 以盛・荒川 謙二 (同 内科)
 阿部 二郎 (富山県立中央病院)
 三輪 淳夫 (臨床病理科)

原発性十二指腸癌は比較的にまれな疾患であり、その臨床症状も発生部位、腫瘍の大きさ、発育方向により多彩であり、球部以外の症例では、受診時すでに進行している症例が多い。

今回我々は、十二指腸下行脚脚頭下部原発と思われる十二指腸癌の1例を経験したので報告する。

症例は42才の女性で、右季肋部痛を主訴に来院、胆管炎の疑いにて入院となった。入院後に黄疸が出現、PT-CDを施行。諸検査にて十二指腸癌が疑われたため、開腹した。術中の迅速病理にて、右結腸動脈根部付近の結合織に癌の浸潤が認められたため、臍頭十二指腸切除術に加え、右半結腸切除術を施行した。

切除標本の病理組織検査にて、十二指腸下行脚原発の中分化管状腺癌と診断された。臍頭後部リンパ節に転移が認められ、リンパ管侵襲も陽性であった。

組織学的には治癒切除であった。

5) 慢性膵炎の2手術例

大坂 道敏・真部 一彦 (亀田第一病院 外科)
大矢 明
片柳 憲雄・田宮 洋一 (新潟大学 第一外科)

慢性膵炎の手術適応については、いろいろと論議されているが、最近私達は、慢性膵炎の2症例に手術を行ない良好な結果を得たので報告する。

症例1は、50才女性で、10年前に胆石症で手術をうけ、1年前より糖尿病と背部痛がみられた。本年に入り、糖尿病の悪化と背部痛の増悪にて入院。精査にて1個の膵結石と膵管拡張を認め、6月に膵管空腸吻合術施行。術後、糖尿病は軽快し、背部痛も消失した。

症例2は、45才男性で、1年前にアルコール性肝障害にて入院。本年1月、飲酒後の腹痛にて来院し、慢性膵炎と診断された。5月になり、再び腹痛と腹部膨隆にて入院し、精査にて巨大な多房性膵嚢胞と膵石を指摘された。7月に胃・嚢胞吻合術を施行。術後経過は良好で、自覚症状は全く消失した。

6) 腹部鈍的外傷診断における CT の有用性

前田 長生・津田 知宏
込宮 裕・下村 年胤
水野 弘・猪狩 次郎 (聖マリアンナ医科大学 横浜市西部病院 外科)
田中 一郎・生沢 啓芳
金杉 和男・片場 嘉明
石川 操・桑原 幹夫 (同 小児外科)
加治 辰美・大山 行雄
作山 摺子 (同 放射線科)

腹部鈍的外傷の診断においては、様々な外力による多彩な複数臓器の損傷を念頭におき、腹部全体を網羅しての検索が必要である。

今回我々は開院以来の約2年間に経験した腹部鈍的臓

器損傷31例を対象とし、全例に施行したCTの有用性について検討した。

肝損傷16例中10例、脾損傷10例中7例が、保存的に経過観察可能であった。脾損傷も含め実質臓器の損傷はCTにより診断が容易であり、全身状態の変化と併せて保存療法が可能かどうかの判定にCTは非常に有用であった。腸管・腸間膜損傷の6例は全て手術が施行された。消化管破裂ではCTである程度の情報は得られたが、受傷後の初期においては画像所見の認められない症例もあり、注意を要する。また、頭部外傷合併例などの意識レベルが低下した症例で画像による診断に頼らざるを得ない場合、CTは非常に有用な情報を与えてくれるものと考えられた。

7) 臀部痛を主訴とした化膿性腸腰筋炎の1例

中村 忠・塚田 一博 (栃尾郷病院 外科)
間瀬公一郎 (同 整形外科)

化膿性腸腰筋炎は比較的稀な疾患であり、確定診断の遷延することが少なくない。本疾患の主訴は、弛張熱・患側の腰部および股関節痛・腰筋部および腸骨窩の圧痛・患側股関節の屈曲拘縮などが多い。そのため、ほとんどの症例が整形外科で加療を受けている。今回、殿部痛を主訴として受診した化膿性腸腰筋炎の1例を経験したので報告する。

症例は42才の男性で、脳腫瘍のため左片麻痺がある。左殿部痛にて受診、直腸左壁に圧痛があり、高位筋間膿瘍の診断で切開排膿を施行した。術後、弛張熱・白血球増加が出現し、瘻孔造影およびCTにて左化膿性腸腰筋炎と診断した。左下腹部より腹膜外経路にて左腸腰筋部膿瘍の切開排膿を追加した。術後、左化膿性腸腰筋炎の症状は著明に改善した。

8) 消化器疾患術後大量出血例の検討

坪野 俊広・塚田 一博 (新潟大学 第一外科)
吉田 奎介・武藤 輝一
木村 元政・加村 毅 (同放射線科)

消化器疾患術後の大量出血はかならずしもまれではなく、かつ、対応を誤まれば死に直結する重篤な事態である。そこで、出血時における対応を考える意味で、1985年1月から1989年9月までの腹部大量出血例につき検討した。対象は11例であり、うち、死亡7例(64%)と予後不良であった。予後を左右する因子として、出血部位、止血方法、出血量(輸血量)、臓器障害の有無、感